

大学が学生に残す財産



巻頭言

疇地 宏*

What our University can leave for students

Key Words : academic learning, creative work, making friends

今年も卒業生を送り出し、新入生を受け入れる季節になった。レーザー研多くの学生を受け入れているので、毎年この時期になると、学生に何を残せるか考えることになる。(この雑誌発刊の時には時期が過ぎているが、ご容赦をお願いしたい。)

1つめは、学問への怖れが無くなることではないだろうか。社会に出て新しいことに出会った時でも、先生が講義で何か言っていたとか、あれはどこそこに書いてあったという記憶さえあれば、それほど怖じけることなく進んで行ける。さらにどんな難しく見えることでも、一步一步山を登るように進めば、必ず理解できるという経験は、心の深い所での自信となって残るだろうと思う。最近の大学の講義は、学生の食いつきを良くするためにショーウィンドー化しているという話を聞くことがあるが、基礎的でがっちりした講義が軽視されることのないようお願いしたいものである。

2つめは入学時には子供だった学生が大人へ成長することに関係している。ほとんどの学生は小学校に入学以来、先生の講義を聴きノートに筆記するという学問を続けてきたと思うが、本当に大切なことは、学んだ知識を使って新たな知識や概念を産み出すことである。私自身は、このことを研究室配属直後に指導教官から言われ、その後の人生が変わるほどの天啓を受けた。目の前の鱗が落ちたと言うべき

かもしれない。その時感じた熱さを伝えようと、いろいろ工夫をして学生に話すようにしている。例えば「どれだけ高級なことを勉強してもそのままでは研究ができるようになるわけではなく、必ず量子ジャンプが必要である」「大工がかなを研ぐのは当たり前で、棟梁がほめるのは良い家を建てたときである」等々。そういえばサッカーの中田英寿選手も引退の記者会見で、およそ次のように言っていた。「プロなのだからがんばるのは当然である。マスコミはそのようなことで騒ぐのではなく、いかに創造的なプレーをしたかで選手を評価すべきだ。」

3つめは、知的レベルの高い人たちが一ヶ所に集まり、かなりの期間を共に過ごすことの効用である。かけがえのない友人が出来たり、素晴らしい先生に出会ったり、人によっては生涯の伴侶を見つけたりすることもある。私の研究分野の言葉で言うと、「密度と閉じこめ時間の積」が一定の値を越えると反応が激しく起きることに似ている。これこそ学生の最大の財産となるはずである。大学は人と人の繋がり、場を提供するとともに、その質を向上することが求められると思う。

レーザー研などの附置研・センターには国内外から様々な人が共同研究に集まるが、そこへ学生を文字通り放り込む。その学生は研究の最先端を同世代の若者が担っていることを知って、その後見違えるように成長することが多い。このような研究環境を提供することにより、学生のもつ力を最大化することに貢献できると思う。

以上、「学問を怖れない勉強力」、「新しいことを生み出す仕事力」、「友人をつくる人間力」が、大学が学生に残すことのできる貴重な財産ではないだろうか。



* Hiroshi AZECHI

1951年12月生
大阪大学大学院・工学研究科・電気工学
専攻博士課程(1979年)
現在、大阪大学レーザーエネルギー学
研究センター センター長 工学博士 プ
ラズマ科学、レーザー核融合
TEL : 06-6879-8700
FAX : 06-6877-4799
E-mail : azechi@ile.osaka-u.ac.jp